明治文二編

上

ヘ 13
2909
7

へ 13
2909
7

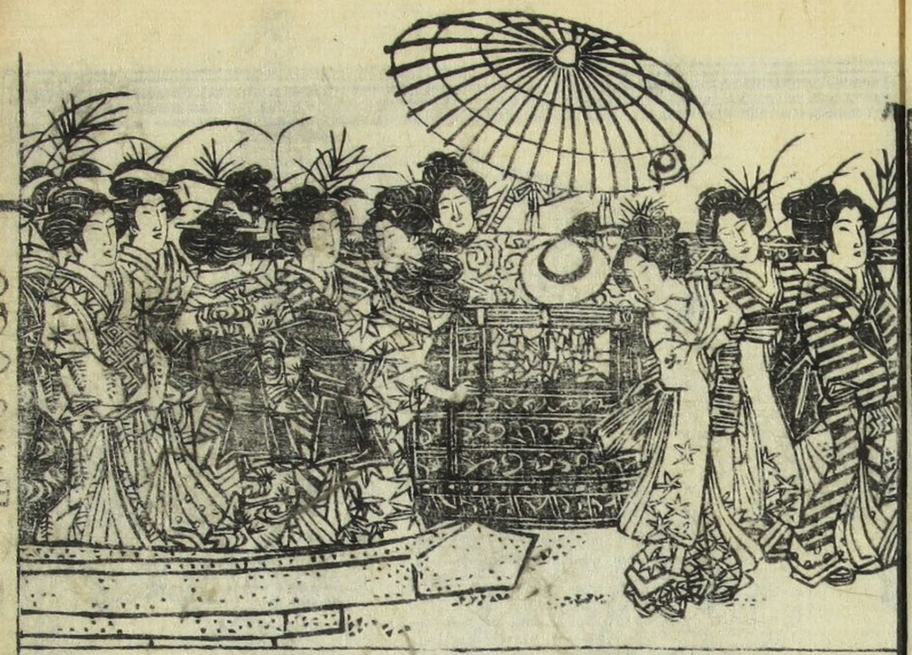
昭和九年
六月廿一日

明鳥第二編序

ゝゝ郡自記あるゝ川とかきのせゝゝ
隅田川の渡ゝ舟岸の東はゝ雲に
紙のせゝ鳴く鶯紙と語りゝ
新内ぶゝ丸一曲を合作のたる三冊の
中本時代と世話と人情ゝ音楽ゝ
観ごろ善悪邪ゝ岩ゝあらはゝ
時次郎ぶゝ月ハ墓當のゝのびおは

甚合方ゑ清望がそこらとたのし
かのうくて船所の袖の雨ふりぶ
たるね注落しあり調子ゑ望ゑ
平次が船の継掉に吹出の
風ゑど調変絃細びれ
糸の二ゑりゑ見合に影の
調子笛あゑ長ゑ姫君ゑ
七種ゑ長ゑ撥行の梯ゑ

はたらゑ子あゑくゑの荒井
みぎりゑ宝ゑ声ゑ向ゑの
人成吹糸也ゑをゑ
たゑ三味線ハカノ荒川の
如ゑ遠ひ。初く糸成
形く撥出
蜘ゑ郎ゑ
意氣地の



面罵壮。

ふ〜

やうこの流行を

穿く伊達

浮世を

送り三重。

うれひごりの

限ぎりへ貞婦

於熙が知のうみおや。

かけてもたのむ

明鳥浅の巫女

浅編へ

鶴賀若狭が

巫女を写し書物やの

扱えよかりて

琴通舎英賀誌

○長尾
○浦里
○荒川淵左衛門
○隅田堤のあまつ

金
同じく其名の香とまで
西へ安の桝と
算せこの節のうるや
天下一金心清浄の文字入
甘心宝とは
揃てもあるべかはめとぞ
うるる到源の
ちらんとを

水道の水口に
清しく
江戸子の
一粒そろと

明烏後正夢巻之四

南仙笑楚満人
瀧亭鯉丈 合作

江戸

第七回

かゝる時何と待乳の夕山風雨と浪とを紙蓑笠よろけて
とも舳面うづゝ。操艪うひみるを掉。なれ〳〵業とく
ゑだ〳〵く。風と浪の濁し〳〵と江汐間と宮戸川舟を
うゝぐて網引揺。たぐゝ片迫へ津田堤。を引〳〵投網
ところのまゝふ。縄を石繰て打いる。とえふ舟の胴の間へ。
ぐゝとひゞのてゝびいる女。これをと驚く網引の男。堤のよ
いあわてる人影。彼舟人へ心きゝて。其風情をや察〳〵片
てゝふ投網を操よせ。片ゝふ女と抱ゞ。耳ゝ口ゝをさゝ女紀
つ。網を引上ゝ〳〵。一声ゝと音ゝて。そゝり〳〵
浪間〳〵うち込ぐ。だゝとたゝる水けむり。南無阿弥陀仏と
いゝまぐれ。ゝのうゝゆへ篠塚婆。駕ゝ紀のゝとゝ大声上ゝ
舟を引たゝ舟ゝ。ゝ声跡ゝきゝて。乗きる早絃ゝ紙

の早業うれて完悟の浦里も。さぶが命のおしてるを難波
あらぬうめ。れうろうあまでも時次郎よ。今一度のあまの
を。心ふ祈そ。きぬ。ぬ。ぬ。

當年八殘暑もつよく。拙者ゑどん獨身也。何ふつけて不自
由ぐら。秋の夜永のゑの死ぐるさ。れ推量下さまと。おそ茶
ゑぞハ二見氏の頼母人取分也別紙ゑぞんぞまと。惡角
ゑを緣きく。出雲の社の片便りを恨ゃとめぢふ社をの花
角力。梅ケ谷へことぐ受流して。物あるさゑぞハ宮て。おあ
好もおぐりまして也内室ち持ぢゆ。まづ。おぞうして
也お夜也裏量ハえゑり。也年齢ゑら也取呂のれて味でぐれ
も也心よけゑぬのでぐりまゑゑ。物イヤく全く女ゑハ

氏ゑて。玉の腰えれ側えれ。ヨゑる年ゑ只一人。惡角さ緣で
ぐぐゑら。眞の前ゑ拙者ぐぐゑをとぐ。てもゑの片便
の赤縄社ぐ。得心せえれねば。叶ハぬゑとえんくまたと。さと
ゑやえんまぐめぐえれ殿の他見繁えれば。めちく。ゑぐら
測ゑゑ。「イヤナ三のめでぐゑ。折をえ合ちまくゑさ。ゑる片
ハゑハ取の梅ケ谷愛ぐとゑまる土俵ぎハ。物立ゑる御年
まゑ。織入の遠敬ハでもゑ。ぐゑ測サ。ハ。ゑの
義ハそのぎ。外ゑ赤とめゑえんぢ。梅ケ谷ゑ抱ゑんとゑる

危さを。別て其事「梅イヤ」の用意ののること。
さまざまな跳めをは頼まして「測イヤ」おまへの用
用。ありと兼ては兼ては他人がまつひ。それ〳〵サア
どうぞ折とこれ合こまつもひそこの服やぐらのせんユのこつこと
ゆ困りこる折こそあれ狭山瀧本長尾とそれ殿〳〵のその
支發者兼て和合梅〻谷ぶ難義とこんなり。三人の女中ハ
さやくも言合せ測右清門ぶ涙ぶら。梅〻谷さまにまた。
いろまてもどうく測左ろう瀧本狭山にぐ。測左ろう折紙

これ〳〵「長尾梅〻谷さまへ何をは頼ゆまれまたときあつけられて
測左ろう「測イヤサ何ゆゆこだろうアホロこのり。顔ハ赤めどうん
智恵の底をふるひて「サア何お姫さまへ伺ひ〳〵義と「測ヤ
そやそやひるゆ仕出されまつさ。お月見のは縁向「測サアその
義もこざまこざ夫ろう以前チト。辺ろそこは厨の仕歩ゆ
を。お進ヤこそふとそんこざろう。の角田川の近面ふ秋の七
草と縁向いこさげふこざると。兼〻年流ゆ兼宇ぶ屋と。
今年始てのこく同出ろもつさ。心のこちふい天へぜも

泳いわるね秋の花園途中へ屋形の舟遊びと顔を合
三人の心とさとりて梅ヶ谷へ「梅」それへ袖ひぢが付まーしと
瀧本さんお二人さんは供がおのやでもあるまいね「長尾源太郎」
ぞいてーて〜梅ヶ谷さんおーこうめ接ぎーませ「梅」さ
ちらっとさまもはのつちうそうん「三人まぐれはあーこうませう
「源太」測ちらっさあーう〜はまがけまーさナア「測」イヤのいあまり。
世間で噂いてーまぎ〜「梅」菊字が屋へ廣ーでござう
まーこ子「測」ハアのびまも方はぞんどうる「さまもまさんもマア十

手紙書こうら流りまと新梅やーさ「測」ハアさーこうみ
ごぜんこうこう「梅」折角のこの品付伺のまーーこらさでれ
撥姫「源」手てーーごはは接ぎ。接ぎーて「長尾」今日ごでん日和も
ー「梅」測ちっ出ーーこはは摩耗のはの迷のやませう「測」
夫は大変何分宜おーこうーー「源」接ナア梅ヶ谷さまは差
おーーうちさまーませと新のこ子ーー涙ひっそう。ちゃんーこうら
ごとお時斗も胸にあーうーう測ちっ出差の首尾へ来る
角も。出場不首尾こうはのつ賄方の不案知を案ーーて

浦里

御殿とさぶらふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第八回

秋の野に咲くや花ぶ指をりてかぞへまづ七草のしみ。
万葉の園待絵の園部類絵分ろ〜秋の綿四季歌詠の
他国よりさめるまで紀津田堀宮戸川に乗ぶうぶく。
うちわのゆ〜紀伝の幕にもぐ〜月とわ。舟孫の毛織や
浪に映ぶてうろく。船ろうまぶこそ流ろく宝晋永の吟も

なのめある。手紫家の奥の一ト殺ん白浪やたぶうえろ〜ろ〜
ろ〜くと。仇側ゆ性に連引ぶ。ろ〜ぶ場うそね町羅者
家形ろ挿ぶ。ぶ〜ぶ。陸ぶ〜ぶ。やぶ紐の。基ぶ〜ぶく
借舟に着晋ろ〜ぶく町羅者ヨヤめやまるのと捨
ぶろ〜ぶ屋ぶ〜ぶ〜ぶ海ろの伜猛。ま〜流〜ぶ〜ぶ〜ぶよ。
物勤番の荒川ぶ。ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ目接〜ぶ〜ぶ〜ぶと
引風邪ぶ。ぶ〜ぶ〜ぶ噎ぶ〜ぶ。今邪ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ
ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜

祠をうけ「ヨく荒川さま今朝極うつまごは接待もかまはぬ
時日あるものが進ずゆえ私共も雅育ひは接待の為出張
ゝ存ます。これハ存ぜうり猿山長尾おまへ方ともきのふの源
氏仲ヶ間荒川さまハ此屋敷こいられて章之「エとこ二人
やまぶしてうつとうやとうおまへ方ともわろ酔機嫌の今翁も
ゝ猿山「ハれよそふぐどざまーさ悔うるぶら持合ます。
ゝとうてが屋敷きこひうまも存ますわろまへ方まうう。
ゝうちうちこまへ出ぬくぶされまを岡「とまうく忘れ多ひ

ぜハ兼ゝハのぐ見ゆて頂戴猿「アイヤく そふお嬢ひちされば
折角ゝとうてが思ひざー。涙ひう屋ゝ揚ぶ見ぶやどざり
ま付ぬぶ。ウ長尾「ヨ夫ゝ狭山あ姿ゝ立まいく岡「これへ
迷惑。ゝ多ゝどざうばハ兎ゝ潟まーてとのもく出和遠ひ
出ぶ紙 猿「アレ長尾ちうう出発ゝ何源氏ゝ嬢ゝ
のりゝ意女房の方ゝ長尾「ゝ。われゝその侵アリや元ト友
龍くまーさ岡「ハエ「肝手出肩持ーさ。源氏ゝ嬢ゝ
猿山「何さあうてが芝居の立者ゝ。ゝ仙ゝ立ゝ

側「八ツ方のもとへハトがそんのあるねは顔色と。二人の舞者口と接〳〵
舞者「イエのり〳〵あさんと成田屋の音羽やしたよ。よく似てゐる
あつ〳〵ゆのぐぐぐまつた。側「これ〳〵エて成田ぐ二義左衛門
拙僧に成りあつさ。「ハイさあつさ。まつ〳〵さん国平卿ぐ
でぐぐいまつた。側「さわぐぐ成田の用帳ども縁起うけ
たあつさ。「ちんよ二番ハ用手紙〳〵まつ〳〵さそぐぐぐり
また。側「イヤ二番ハ知らぬ。市川国平卿国方でも美男及ん
であつてまぐぐの挨拶。姫君ぐも知つて矢部の嫁婿さる月の

鑑つやうさる。雲のの花めいくまもとぐずきのハのの桜か
ぐ。あつまるとうと赤ちぐ〳〵。側に居ちぐ桜出局の五十
光と紙〳〵岩浪屋の。膝ぐ赤ちぐう抓ぐ〳〵「ヨイタ〳〵
こまハ側「石ぐつさあ。私ぐぐぐされまつたと。搏られて
物ぐて。ちぐげらまもせた。側「イヤ新出ちぐ。お孫〳〵「エて
きみのつるひと女中のちぐ。拙ぐぐちの。笑ひも安かちの
心知ぐてる。拙ぐ尾の三人ハ。柿ぐ者と新見合せ。「ハイ
めまハ側「石ぐつ。ぐぐて。ちぐて。ぐぐと威ちぐて。ちぐる慣ちの

船宿「まづ〳〵これなら測定つかまつる所無事と申意を花ぐせ
測「イヤこれは又出情なり。おそさの岩浪屋ぶ。あまり侍ふ仰
らまつる也 農「まづも如何丸兵衛もいつさつ人なんと
思ひ入たく。いつたにちつてもつまることれぬ仕こちぶ。
同りこれ深夜の測定つかまつる。そこの名盛さめさ
まをとう紀 測「イヤ仰らまつる 船宿さん出掛とわらひまする
若年そこまやこそ船宿 「イヨ船宿さめく〳〵と云ふのあと
つゝひの種。女中と相ゝ持めまつる酒機嫌クツ〳〵

どこのこの声女郎〳〵。取揃の音浪の音。ゆどゝく家形の笑
女郎の揚場。着ぶ。客級浴ひ帯と申。陸も待し
出先供。羽織袴の侍五人二列にたつゝび。あゝみ静に出る
刀ゆゝの唐紙持〳〵。振袖の中姫十四五歳撫ぶ。
青傘ゆゝ家まのこと也。津国屋。
子拍子ゆゝ先追ふ者。和らゝるうさ。
のゞとんせゝ。ちつ十ヨおりゝ。子肌に負ひ
たゝもこゝ〳〵。ムさちゝ。ちらゞの買つこれ

さつ〜そのと陰歩行。中に花形新の出れば。浦嶼子別れて
後時次郎が眼病を一ツふかぬ抱〜て。そふも此場よりまづくねの
五郎擬拝に入まく。子借と先を手のく〜蓑るさぬ扶ふ
ね月い夫でとも。知で縋る接ぐ袖の下。ろつ〜こんろすす
面ぐ〜の。我身に仏れど出ひげぬ形りもそぼろの田舎言
よりやと心つがこそ。ち松いりくさと無ぐさもうろあぼへけ
うに美ぐ〜に因勢。只扇ひと仕屋ぐと先人出れあけ蹴れ
付キ。友に深ぐ〜愛い刻「サアく〜笑ろてこれさつ〜そのあらが

投ぐ〜ろんせまにぐの口里のみナアニあらがよてに投ぐろうしとの鶴の王
ろ立る里袋。ふ〜ん了の郎あづじく。投ぐよ〜れ言にの屋り
のろ供。そろ〜ろ立我了と川面にちく〜と出ぐの。ち絵へ
げ実にもまぬ入る業にて妹ちまんどの亜とぐ〜く。翁ひ
ょう弁のり。三宝の紅葉吉野の花吹雪に散ぐ〜と
風情ろうを出撥場弾にろ〜けまび側ろう変ぐと例
のさ〜出者にく閑ま〜ろ供乗拝ぐも先手ぐ三宝の
物アと出宮の五条ちし立ぐ。ぐと年に歩ぐねと。ぐ人

ふもく〳〵と云器に数とりて投げまぶ。風流なれば
こそ。どうり〳〵とろ〳〵の。落て。不ト踏ふるまうさ一真
ゆや。姫君様始め数多の女中袖震のく笑ひ。イヨ
舟出さあ〳〵こんま〳〵とそやし立ては盛り三だらを
持ちく。ゆがやきうて投へ立ども。出来ぬれば拾ひ方なく。
里の子供ら。沢知ら孤ど。舟出さあ投さうし。のうとげ
さうしあのと。実才童にいつてせれ立ちのいう無外ぞう
こいがれあら片ま〳〵とわうみ対ぬそこそこうさ

船出どのが家のうち〳〵とぬ紙さ入れうと逃ちるとぬ家そ。
皆しい夏に出少体石の出来の隣ぬる。ぬ〳〵のつけれ
宗福寺へで入ト寺さける。ぬばうくあ立て門ぜん
さうぐ〳〵今のぬ出童の子供柴何ぬ立へ投ぬ立く
イヤもわがのぐや夫でもこんぬ対ぬ六ケ所ぬる
ぬ。拾ひ対へ家ぐやく。捌合の手りぬ角ぬ立中に
投もまぐや。コ紙〳〵その中ぬ紙ぬ立ぬのぐや。縁ぐ見の
てもコリや慣に今の家さぬのぐや。ぬ立ぬ立ぬぐぬ

ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ
ちゝ母こゝろ

また「ハテ」種ござとんば子供衆に貰はせて
と　ちゃうちゃう菜らーやのうちらま」とういざーとまうるとけうりの
子供につくらーとれば里の子供いちうこびくざれたるうち立うくる
中に和尚さまのおとうどー「イエ」こりゃーい拾ひもの」ーまぬ。
お姫さまのでめやまをうと。なまうとせやさ斗りてだざるを
まるとおるひとうまれば「ハテ」扨今の一番ちまだ。そらも詩を
ちる　京ちひ。男ふてあけとめたけまだ「イエ」く人さまの
拙自紙一まのでも。筆ちひのよ宅へ持く戻るて。煙ん
ぶよ人ちまてござりまだと。ちうくうるきーさをこるうちきさだが
女中ちめられとおれとびとうて

コレそうさの名人第とのの「アイ」和尚さまは「ハテ」
そうさの宅いこの近くうや「イエ」く花形材とりて半月
も隔ておやまだ「ハテ」ウそ花にまイ所ようまま。宴
一人ぐ高ひに来るのの「イヤモシ」氏ようと育とやまだが。
見あげまーとる女子のの花シテ手のいくつどぞ一十二
ホ成まだ「ナニ」ぐう十年ぞやハテ「ア」そふーとくまま用合
に仲合ねぐ孫のうさ奇麗る生れ。ひとともあま
父さんや母さんがようふるひとて高ひに出だこそで。なの

そのてやかたがこひ〳〵ふちやせわと言うまてくおのつゝど
涙ぐむ。おさまる心地。涙とゝて。春まて成そゝろ。絢。扶ふ
たゞまても。濡やせん。折〳〵中老梅ヶ谷。関。涙つゝとゝ
らまつ。ゆく〳〵づゝて。迷ひ。後の方より。関。コリヤ梅ヶ谷
どの。てがつゝろい。お待ちまて〳〵。武蔵まで行り
兼〳〵。衛士の新に。花ゆ。みちの。濡ふ。場る
梅ヶ谷。行義ぐさ。正直一関。つゝあなんでござり
まて。今日の大切る出。出。り。出。濡いもの〳〵ちまれまを。

イヤ〳〵。逆てゝ。ゝ。ちらと。見お。成。そ。ゝ。ちまて
ゆ〳〵。ひゝ。物。モシ。ゆ。ゆ。ゆ

おれば涙ぐみ、二人同じく下さるまえ。母さんにさてこの子が
幼時お乳が強くて宅を出ず。こうして達者でもせば。
世に生きてゐやちやんとまひの〜ぶくてごぜんと
うふ。まあぐんぐんとめとねて。そのやうまもあらん
のかの。そのとき、ひとりぶんちやん〜ぶるでめらんと姉さん
が。常くいつてごぶるまう〜。その姉さんと可愛がられ
て。育ちまてもまやむ。その姉さんも山者と眠たきぐ
ぶ〜そこぶもちろんぶやろう。荒
出尾いまやくまさあり〜て。その姉さんも。死ぬられさとい

ようるるひナ一住〜ぶ蔦て〜ぶんが祖母さんが
来ぶ。何処〜ぶ連ぶ行ま。一寸ふ。
一度も来ぶるのぶふ。泣衛ぶ。梅ケ谷ハ。腕り
めぶまの人間せぶ。心先ハ。花衛ぶ。葉の。扇の浦里
ふ。彩〜ぶぶにめぶるぶ。ぶぶに。完米金ふぶぶ。鏡
ふぶを我供ふ。仏ぶそたぶぶね嫁ぶと。ぶ〜ぶぶが
渕左衛ぶが見る眼もめぶ。懇〜ぶも。涙ぶ金ぶ
挿絵（モンめぶを聞ぶれぶ。ぶんぶ。ぶめい幼年

長尾
あちたろう

さやま
梅ヶ谷

時うこいろく。苦労といてまたいろのチト。法員式隠ことを笑ひ
顔測度つい酒機嫌。玄関の方をぎろつやとこんあり。関ろう「イヤ
の「下ろの中見わいさまくくろさまひろ。法くなどこと術で
おぎろ。幸次「エモシうこんそこに。関「イヤ〳〵おてまつぐこ何もかなど
ろひうこいや。拙者ろそれ毎度式くあて。鰻を堂千屋うさ
るもございく。近ひ後ろ富田氏来ひ拙ぐ〳〵こ善を比
賤女ぐ行くぐこと。幸次「されぐでござる。まこんあれぐこの毛ろ
娘関「イヤサその毛ろ大ろる偽り。慥にそやろあぐ盗ろいく。

他の子偽く見外ろまぐろうてころろふ落ってあつこと。
行くぐこ。幸次「落ごこ。余人ろ捨別ぐ関ろ富つぐまぐそのろをこぐ
ろさわころさま憎ろまにれろ法ろまぐ「コレ
お待ろあぐさの〳〵盗式ろころ。出藤養吏の金式莫ひ
まに「虚いろろあぐこりや荒川屋の要拙ろ中のの孫のろ仕ろ
出藤養吏ぐやこ。狼式いぐ死ろ。イこに式狼ろい拙退ってい
関「サくそれぐろでござる「毒イ子のり。悔ろぐろこ仕ろ吏の深ろ
ユミ関「親ぐ知〳〵。幸次「コリヤヤイ。コとぐ親ろいこ。ろて拙ろ藤〳〵

鼻でも落て指が生るの。ゴロ性者だ。ゴロ
こまでも正仕合。くうまひ法度。おそそそひおつさなアト
きこゆさうれね悪敵きめて手死様がやらりまさらり「ゴロ」や荒川どの
のこまの年五三三つも余りまるこんをまたそうして「ゴロ」や荒川どの
いちぶんにおれいこまそうたこが法者でがあるまたもせよ。
痴者共のらこねの心の法さ。衍でごぎこのこりのこ衍人廉
びと生こうこの接者グコ念コ「ア娘大変ひ此廉共男人
てもあ人ひ。そりや生るまとそこ法共。お松こうしるやこび
おれ「ゴロ」はおこふぎるまん。それ男ふこう横のふこうのうこぶひ

かるまたここここ。や姉さんの河岸ふくもぐ人て居る。そんな
おあこいまままれね。眼法娘のてぎる時法鼻ぞんみ系
を貸ってこるこ人数ねのを去男共ここらくく。おめ的の
男にいこ。まままこ。おやこうこ数けば接ゲ居る。悪く心の悪び
法あこうの袖も乾あこね。男人涙の廉事あるる義法金に
吹嵐荒川関左後ひこ去知りこる酒機娘関「そそやあそ
見ぞまこいこねここ。食の涙盗人こぶひる自状さぞんとここ
ここ涙の方こう去こけて。猶さぞ法ぞこ大家の

老女殺されてそまてく岩浪へ〜渕右衛つさみさやこくく。
ぐうえぎるひこ伝まるの此処登り「アイヤ」ひ中浪り街でぐる
岩根これいちさう。たこまがおるゆもせこ多まるこ遠ひ
まるる。道おの所ぐさやうを。淋ゆへ岩ひ寺道加之雅非
道ちゃこくちぐとも。千吉の此家のちが出まる姫君多
の此立腹掛ぐ食さあサア貴さんまほ。渕出多つさあサア清
座敷へ側へイザまづちこ人側女渕右衛つさみらまた
サアこまるとぐ。玄関にお松へ只一人り浜子と池頭と

ぐ。ちるこ。ちるぐ。此場と渕右衛つ。こてこんこともる折ら。
籠つくぐこ。夕ちの雨下ちるり降出て。波の方ふ雷
の音。ときるぐく伝まれびゆこそまぐひく一郎ふ出更
ここへ馳ちる。駆ちる。お松へ袖多ま。雨れちのぐにいとせ。
袖を拾ま。おがりつ。帰りもゆらぐきまぐ宅ちませ
時次郎。月病の獣いちるこ。こんこ。安井ドてまこそへ。ちる。
さそも中老梅ぐ台い家中てうこ八年浦里さこひおこぐれ。りておぐ
れぐら。二見ちまるつ。このこてそれこ。ぐれ。ちるこ。ぐ浦里
うこゆへちれぐもこのこ。ぐうのうめ。も娘おまるぐうのこぐうこ。ぐこ
ここも。梅ぐやぐこちゆれおこさこ。ぐ浦里ちるこ。ぐ。ちるこ。ぐ。ちるも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

お姫さまのお葬式の行列が大きくなるにつれて
役ふしがコレラのお葬式必ずよろこんでもらうの宮ゆく朝メ
不自由なお豆腐やくこの豆腐屋の今の娘や
限りなく親の思ひのやるせなさ涙の玉をちらつ一モシ
ちまえ人ぐりんの母さんちゃぐのつで戻つてやさりまを
出来ますまでわ楽々暮らす嫁さま出来ぬ嫁常に多の焼へ
来ぬ。たまを買て貰て。こんなの母さん養のまんれなる式
あめて戻つて下さひまし。独で力ひび母さん泣

ごさのまゝと。変とぐるるまを程一でのまるさ。鼠とるで
ろう。捨ろう。て新打まもり 林「まるのひとこと云
あろう。母さんのうちまた美たれど。元のおろうの祖母さんは
ぶつく。邪見とりのて親戒根の不安の眼。こ。ぐのさ
ぬ本を見て。のの。ろう。状のめることや必ずの根も
ろう。未ぐ。訳も知れるまで。そるのろのあのとさんのと。
ちんとせ。ぐあろう。見。れ。ぐ。
ある。て。母ぐやこのやるまを。の者の。人の。
知るの。廻りや。松。アイ。ロイ。ト。

いつぐ後妻こそ時れてもまれぬ親子の涙のこころ
ちゑ折〻〻おもふ孝行者の孝行者ちゑで飽ぬ
名所の中に製測者つぐまとまつよりもくく咲られが。
拾方涙位形式。遠尺仁義の孝行者の袖を彫ふ賞
みまとぶ子げ子涙ぐ。尺中に服えて白粥もとけて流るる
濁田川母の孝行者門者。

明烏後正美四之巻年